

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
川端渉	第2回の内容で据え置き	小説や絵画や写真などに触れるたび、その中にある「音の気配」に、いつも耳傾ける。色彩や光や風や薫りも舞っている。 文章を書くのは、彫刻という話。どンドン掘り出し、新たな命を吹き込み、自分の声や想いを体現したものを、その中に見出さない限り生かされず、ひとのところに響く作品は生まれない。言葉が憑依していく。 そしてそこに音の気配が。色彩や光や風や香りが、舞い始める。 音は聞こえる、聴くという「外なる音」に耳を傾けがちであるが、「内なる音」の存在を感じた。 音楽に存在する「内なる音」とは？ 自分自身の音楽および音と触れることで、身近に内なる音は、楽譜の存在かもしれない。楽譜自体は音を発するわけではなく、音へと変換されていく。しかし、内なる音とは楽譜自体の音であり、楽器から変換される音を指していない。即興型のジャズの世界で音を学び、楽譜の美学ともいえる内なる音に耳を傾けられなかった。どこかで楽譜を敬遠していたのだろう。	いろんな方の話しを聞き、気づきから毎回テーマに対して近づいている感もあり、これを繰返していきたいと思いました。
川端渉	内なる音、外なる音～感受するわたし～	テーマだけの記載のため、割愛。	
山崎陽	一人間にとつての音楽話	今回気になることが多すぎて整理仕切れなかったので、明確なテーマは持たず、単純にお二人の音楽との関わりを、1、物語（宮内さん・杉原さん）2、音楽、3、映像（ビジュアルイメージ）の枠で捉え、それを一人間の音楽話（プリセット）として自分のライブラリに加えたいなと思っていました。 結果的に皆さんの音楽との関わりも改めて聞くことができ、いろいろな視点が流れ込んできた時間だったのですが、自分にとって特に重要なと感じたワードがあります。 一つ目は宮内俊樹さんの「クロスボーダー」。この感覚はずっと持っていたつもりでしたが、宮内さんはその点と点の範囲がとてども広く、見えている景色が圧倒的に違うなと感じました。考えを月ごとに文章化するということも、激流の中で自分と目標との位置関係を確認するための術として自分も活用せねばと感じています。あとクロスボーダーの産物を、割り算で捉えることもハッとしました点です。自分の解釈だと割り算は、「掛け算のミニマリズム」であり、研ぎ澄ましていかねばならない感覚だなと感じました。脳を柔軟にしておく姿勢や、目標設定、達成までの歩み方など、音楽の話というかは、新たなアイデアの創造を行なっている人の話として、一つの解を得た感覚です。モチベーションが上がりました。 二つ目は杉原環樹さんの、「アート・デザイン・建築と、聴覚芸術の間にできているアート」というワードです。これがキーワードというよりは、連想されたワードである「座標」がポイントです。これは杉原さんが、自分の「座標」が「アート・デザイン・建築」にあたって出てきている言葉なんだなと感じましたが、さて僕はどうか？と考えたときに、私がどここの座標にいるのか杉原さんほど明確に言えないことに気づきました。私は完全に視覚芸術出身ですが、いまは音楽に専念しています。そこで自分の座標は音楽にある、と言おうとしたところ、果たしてそうなのか？という疑問が沸き起こりました。音楽を作っている以上、音楽が主軸であると言えそうなものですが、どうも個人的にモヤモヤします。これは経験をつみ、価値観が増えることで解決しそうなものなので悩まないのでありますが、確固たる自信を持って自分の座標を言える（自己評価できる）、ということは、今後活動していく上で間違いない必要なことで、簡単に言えるようなことだと思えば、実はちゃんとと言える人は僕を含めてあんまりいないのではないかと思います。流動するものですし、その時の捉え方によりますが、自信を持って自分の座標を人に言えるように、鏡を見ながら進んで行こうと思います。 あと、岡田さんの「ごはん」が脳に響いています。テクノウどんやとんかつDJアゲたろうしかり、音楽にも「ごはん」が直接関わってくることがありますし、裏周りの意味でも大事ですね……！ ああお腹が空きました。今日はカラムーチョ鍋にしようと思います。真っ赤なスープに緑の野菜、や（菜）らかな豚肉シャキシャキもやし。ビールを片手にグツグツ煮込んで、（休拍）締めは乾麺卵を二つで決まりだね！失礼しました。	毎回新たな感覚が芽生えたり、見過ごしていた感覚が大事であることに気づかされます。濃厚なお話が聞けること確定なので、予習で頭を整理しているのですが、終わってからあれやこれや聞きたいことが出てきます。 今回聞けばよかったなと感じたことに、「ビジネスマンたちは音楽に何を期待している（と思う）か」「今求められている音楽とは何（だ）と思うか」があります。漠然としています。自分たちの求めている音楽の姿をはっきり認識できていない人（会社）ってたくさんありますよね。むしろ音楽が必要だとすら思っていない場合も。アートプロジェクトというかは、河野さんの言うような「ビジネス」に寄る話になりますが、スタディで学べきテーマとして持っておこうと思えました。毎回頭の中は濁流ですが、次回も楽しみます。
村瀬朋桂		今の自分と音楽の関わりを地図をつくる作業は、たくさんの気づきがあった。というのも、いざ書き出して見ると、自分と音楽との接点がとても偏っていて、とても限定されたものだったことがよく見えてきました。 自分と音楽の接点ってこんなに狭いのかと改めて実感しつつも、自分では音楽として認識してないことも、実は自分の地図に入ってくる可能性を感じました。 宮内俊樹さんのお話の中で、文化をネットワーク化する、点と点と繋ぐという話を聞いたこともあり、自分の中の点をもっと書き出していく中で、点が繋がり、地図がもっと広がりをみせる。 正直、今の地図ではテーマがまだ見えておらず。むしろ、自分の中からテーマを拾い上げるために、ちゃんと自分と向き合って考えないと。という気持ちが強くなりました。音楽そのものの捉え方を広げたり、自分では気づけずにいる点を地図に拾い上げる作業をして、テーマを明確化できるようにしたいと思いました。	宮内さんが毎月行ってる「自分がそのときどう思っているか」を、書き留める作業は面白いと思いました。これからやってみようと思います。そのとき何を感じてたか、書き留めないとそのときの感情に戻れないので、考えをアーカイブしていくことで、過去の自分と対話できて、面白いアイデアが産まれそう。 あとは、スタディの話からずれますが、いつも何か文章を書く際に悩むのですが、杉原さんのお話は気づきがたくさんありました。書くときに事実だけを並べるのではなく、ひとつの筋をみつめて書く。筋が見えないから、文章が面白くないんだと。そして、テクニックも。なんとなく書けば文章にはなってしまうので、だからこそ、意識して書いていきたいと思いました。言葉で伝えていくことは避けて通れないので、本当に学びが多かったです。
山下直弥	新しい音楽の伝え方・売り方・巻き込み方	違う分野の人同士を点と点でつなぎ、新しい価値を生み出すための仕組みとそのつながり方に驚きました。なんとなく、作品の中身だけを意識していましたが、その作品からどうい対話が生まれていくのか？ どうやってそれを人とつなげるのか？ 作品を上演する場合、そこまで考える必要があるなと思いました。僕は今、演奏会や作品の企画制作に関わっていますが、実施するだけでそこからどのように自分や関わったアーティストを展開させていくかまで考えられていないことに気づかされました。 また、自分がやっている活動が「音楽」の分野だけで見ていくことに意味があるのかというのとも考えさせられました。宮内俊樹さんがおっしゃったように、同じジャンルの中で評価されないもの、文化の中だけでは捉えられないものもあると思います。自分が音楽に関わる中で、ジャンルという枠組みにとらわれず、より多くの人々と対話し、一点ではなく違う見方ができるようになりたいと思いました。	自分が何に興味があって、どういう風に展開してきたのか、とても綺麗に整理されたような気がします。宮内さんの記事読んでみたいですよ！ 僕も自分の演奏会についてレポートを書いたことがあるのですが、自分がどこに地をつけて書いたらいいのか、誰に向けて書いたらいいのかわからず、中々筆が進まなかったことがあります。文章としてどうアーカイブすべきなのか？とても重要な問題だと感じています。
蠟川小百合		・宮内俊樹さんも杉原環樹さんも、音楽そのものを伝えるというよりは、音楽を一つの切り口にして物事を掘り下げたり広げたり繋げたりしながら伝えていくようなことをしていると感じた。そこには必ず人の存在が見える。ミュージシャン、アーティスト、そして読み手など。 ・宮内さんは、毎月自分自身のためのステートメントのようなものを書き、現在地と目標を確認して前進していて、だからきっととも発する言葉も整理されているのだと思った(今まさに書いているこのテキストも、それと意味合いが近いものだと思うので、この先もこういった作業を継続していこうと思った)。 ・杉原さんは、ライターという職業の本質と社会的必要性を自らの仕事を通して訴える姿勢が印象的だった。 ・後半は、自分と音楽との関わりについて考え、いろいろと書き出してみると、今現在は具体的な活動や仕事としてやっていることがないけれど、これまでさまざまな体験・経験をしてきたということに気付いた。 ・清宮陵一さんが自身のマップで、「3つのプロジェクトは異なってそれらが離れていけば離れているほど、それらを結んだときにできる宇宙が広がる」と言っていたのには、なるほど！と思った。	会場もおもしろい場所でした。いつも時間が足りないと感じるくらい、一人ひとりの話を聞くのも興味深くおもしろいです。パーベキューには行けませんが、メンバーで飲み会とかもできれば良いなと思います。
高田和音	まだ模索中です……	雑誌の記事がどのように作られているのか、またそれを執筆する方がどのように相手を見ているのかわかることができました。今、大学の授業で、同じ大学にいる学生のアート活動をインタビューして記事に起こし、それを外部にもむけて発行するというものを行っており、とても勉強になることばかりでした。 自分の中の音楽の座標を探る、マッピングは、過去の自分がいかに今の自分につながっているかということを変更して感じさせてくれるものとなりました。音楽に何かしらのかたちで自分がいつも関わっているということが意外だったし、それを楽しんでいる自分がいたことを自覚させられました。 また、世の中に様々なことに取り組む人がいることを実感し、あれを勉強してみたいとかあそこに行ってみようとか、自分が今やりたいこと、挑戦してみたいことが増えていく時間になりました。ほかの方のお話も聞いて、音楽へのかかわり方はひとそれぞれであるということを実感したし、少し、自分なりの「音楽の座標点」がぼんやりと見えてきたような気がしました。	今回のお話を聞いて、自分の本当にやりたいこと、そして過去にじぶんがやりたかったことは何だったのだろうと見つめなおすとても良い機会となりました。毎回のお話がすごく刺激的でここにきてよかったなあと思うばかりです……ほんとに楽しい。
桐明紀子	場と人で「音楽」を起こす	音楽からYahoo!で防災アプリなどの制作に広がること、職人業のような編集の対比が印象的だった。お互い発信という点は同じであり興味深かった。	音楽はオーディエンスの体験が必要となると思うが、それは当日前後の記録やワークショップなどの体験も有効に感じた(鉄工フェス参加から)。
宮内俊樹	Freeform to our music 音楽のフォーマットはもっと自由でいい	アートやカルチャー、クロスボーダーで音楽を解放していくとき、いちばん最初に見えるアプローチは仲間を探して対話すること。それはもっともシンプルでもっとも有効的なアプローチだと思う。	このような場に参加させてもらえてとても光栄です。そしてこのコミュニティがとても「フィロソフィーにおいて自由である」ことに敬意を感じています(決まりごとがない)。今後もいい問い、いい対話をしていければと思います。またこのコミュニティと自身のビジョンをクロスさせていき、気づいたことや発見したことをコンテンツとして発信して、貢献していければと思います。
杉原環樹	スタディのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの模索されている音楽の新しい領域に関心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいでいるもの。このスタディを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。	スタディの第3回である今回は、宮内俊樹さんとともに自分も登壇者として参加させていただきました。その場でも話しましたが、「ライター」と言ってもその活動のあり方はさまざまで、僕は「自分の主張」ではなく、「他者の主張」をかたちにするための文章で、世の中に溢れている一見「普通」に見える新聞や雑誌やネットの記事の裏側には、実は、句読点ひとつに悩みながらそれを書いている記者やライターがいる。その立場をいかに社会化するかということは、やはり自分の関心ごとですし、それを伝える語り方をより磨いていかなくてはいけないということも、今回の参加を通じてまた感じました。 また、後半に行われた自分の音楽の座標軸づくりのワークのなかでは、参加者のみなさんの描いたマップを見て、自分にとっての「音楽」という存在が仕事の範疇に偏りすぎているということも実感しました。	感想ではないのですが、会場で言い忘れた語っておきたい持論として、「インタビューには二つの「現場」がある」ということがあります。 ひとつ目の現場は、まさに取材や収録が行われるその場所のことです。そしてもうひとつの現場は、取材での言葉が一旦まとめられて、赤字が入られるために出された、「ゲラ」と呼ばれる仮の誌面の上です。 僕の経験上、より優れたアーティストや音楽家ほど、この二つ目のゲラ上での赤字にこだわります。なぜなら、その場所は、彼らにとって自分がどのように言葉として歴史に残っていくのかを考える、最後の場所だからです。よほどの人でない限り、取材時の話はそんなに達者ではありません。でも、その不足をゲラ上でなんとかしようとする人は、歴史への意識があると感じます。 自分の言葉が、後世にどのように残っていくのか。記事というものは、日々のなかで無数に溢れていますが、その奥では、残し方をめぐるこうした闘いがいつも起こっている。そうしたことを普段、記事を読むなかで感じていただければ、あるいは、自分がもしも記事になる機会に考えていただければ、自分が今回お話をさせていただいた意味があるのかなと思っています。